

## 下村 脩先生と薬学雑誌

「薬学雑誌」は2008年度ノーベル化学賞を受賞された下村 脩先生とご縁があります。先生は昭和26年3月に長崎医科大学附属薬学専門部（現長崎大学薬学部）をご卒業後、安永峻五教授（分析化学）のもとで実験実習指導員となり、研究者としての第一歩を踏み出されました。原爆投下後の混乱期で満足な実験設備もない状態の中、「無機クロマトグラフィーに関する研究」を進められました。困難な状況にもかかわらず、研究成果を7報の論文として「薬学雑誌」に発表されました。最初の研究成果は誰にとっても、懐かしく忘れることのできない思い出だと思います。

下村先生は、その後、名古屋大学理学部の平田義正先生のもとで天然物化学の研究に入られました。さらに渡米され、プリンストン大学に在籍されながら、ワシントン大学フライデーハーバー臨海実験所で発光タンパク質のご研究をされました。カルシウムにより発光するイクオリンとともに、ノーベル化学賞の受賞対象研究となった緑色蛍光タンパク質（GFP: Green Fluorescent Protein）をオワンクラゲから単



下村先生と筆者

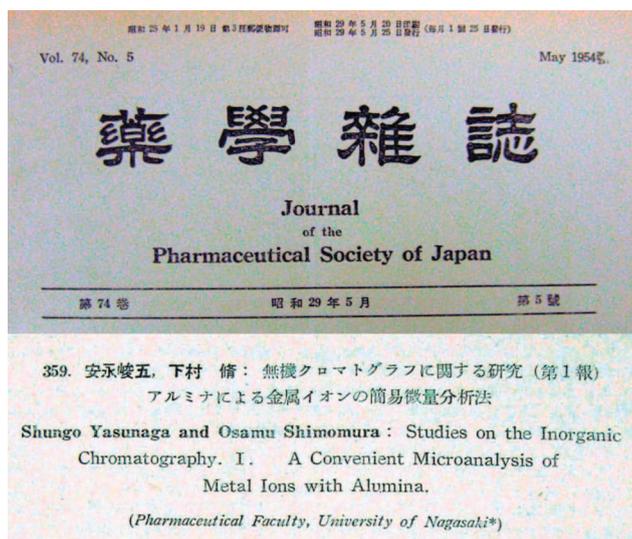
離しました。このGFPは、現在では多くの生命科学研究者により生細胞、生体組織あるいは個体レベルでの動的なイメージング解析に汎用されています。生命科学研究には欠かせない研究手段となっており、下村先生はその先鞭をつけられました。現在も、発光生物の研究を中断することなく続けておられます。

平成21年3月24日に東京国際フォーラムにおいて、日本薬学会、日本化学会、日本農芸化学会及び朝日新聞社の主催により、「天の導くままに一発光生物と半世紀」と題する下村 脩先生の講演会が開催されました(表紙写真)。満員の聴衆を前に、先生はご自身の研究を振り返られるとともに、若い人たちに「難しいことに挑戦することと成功

するまで諦めずに努力すること」の重要性を論じられました。先生の研究に対する情熱と真摯な姿勢に出席者は皆一様に感銘を受けました。下村 脩先生のノーベル化学賞受賞は、日本薬学会として非常に喜ばしく、また誇らしい出来事であり、先生の業績を称えて日本薬学会名誉会員の称号を贈呈するとともに、日本薬学会長井記念館にて顕彰しています。

平成21年8月

日本薬学会 会頭 松木 則夫



下村先生が最初に発表された論文タイトルと雑誌表紙